短 報

穿刺吸引細胞診にて診断された授乳期乳癌の1例

岐阜大学医学部第1病理¹⁾, 高山赤十字病院検査部²⁾岡本 清尚¹⁾ 中村 淳博²⁾ 杉江 茂幸¹⁾ 田中 卓二¹⁾

I. はじめに

授乳期に乳癌が合併する頻度は諸家の報告によれば0.94~4.45%と比較的まれであり、組織的には、充実腺癌が半数以上を占めている^{1,2)}。われわれは、25歳女性の授乳期に、穿刺吸引細胞診にて乳癌と診断した症例を経験したのでその細胞像を中心に報告する。

II. 症 例

患 者：25歳，女性。1妊1産

家族歴：父；胃癌

既往歴：特記すべきものなし

現病歴：妊娠経過は良好。妊娠6ヵ月に右乳房上方(A-C区域)の母指頭大の腫瘤に気付いたもののほかの症状なく放置していた。平成4年11月8日、高山赤十字病院にて女兒(2,760g)を自然分娩。分娩後母児ともに経過は良好であったが、腫瘤が増大してきたため同年11月13日、同病院外科を受診。受診時、腫瘤は径3.5cmで硬く、辺縁は不整であったが移動性があり圧痛は認めなかった。超音波検査にて腫瘤は

充実性、辺縁不整、分葉状であり、葉状腫瘍が疑われた。穿刺吸引細胞診にて乳頭腺癌を疑い(class V)、同年11月26日に腫瘍摘出術施行、病理組織学的に乳頭腺癌と診断され、12月8日根治術施行(T2a, N1, M0, stage II)された。摘出腫瘍のホルモンレセプター検査では、エストロゲンレセプター(ER)、プロゲステロンレセプター(PgR)いずれも陰性であった。

III. 穿刺吸引細胞所見

Pap.染色にて、重積性を示し核の大小不同の著しい腫瘍細胞を多数認めた。核クロマチンは顆粒状で増加し、大型核小体を有するものが散見された(写真1a)。そのほかに、孤立性ないしは小集団を形成する少数の授乳期乳腺細胞が散見され、これらの細胞は比較的豊富な胞体と小型類円形核を有していた(写真1b)。以上の所見より、授乳期乳腺に発生した乳頭腺

写真1 a：穿刺吸引細胞診。腫瘍細胞は明瞭な核小体を有し重積性を示す(Pap.染色, ×350), b：穿刺吸引細胞診。豊富な胞体と小型類円形核を有する授乳期乳腺腺房上皮細胞(Pap.染色, ×350)

A case of breast cancer diagnosed by aspiration cytology during lactation

Kiyohisa OKAMOTO¹⁾, M.D., Atsuhiko NAKAMURA²⁾, C. T., Shigeyuki SUGIE¹⁾, M.D., F.I.A.C., Takuji TANAKA¹⁾, M. D., F.I.A.C.

¹⁾First Department of Pathology, Gifu University School of Medicine

²⁾Division of Pathology, Department of General Laboratory, Takayama Red Cross Hospital

論文別刷請求先 ☎500 岐阜県岐阜市司町40 岐阜大学医学部第1病理学教室 岡本清尚

平成5年8月25日受付

平成5年12月18日受理

写真 2 a : 摘出腫瘍の組織で、乳頭腺管癌の像を示す (H-E 染色, $\times 350$), b : 同腫瘍組織周辺の授乳期乳腺組織 (H-E 染色, $\times 175$)

管癌と診断された。

IV. 組織診所見

腫瘍は、核小体の比較的目的立つやや大型の腫瘍細胞が充実性ないし腺管形成を示しながら増殖しており乳頭腺管癌の像であった (写真 2 a)。また、腫瘍の周囲には、通常の授乳期乳腺の像が認められた (写真 2 b)。

V. 考 察

今回、われわれが経験した症例は乳頭腺管癌であったが、妊娠・授乳期の乳癌には充実腺管癌が多く報告

されている^{1,2)}。授乳期乳癌の細胞像で非授乳期のそれと異なる点は、授乳期乳腺細胞の有無のほかに前者には背景に蛋白様物質が出現することがあげられている。

妊娠あるいは授乳期に乳癌を合併することは比較的まれであるが、その場合、非妊娠時・非授乳期の場合と比べ予後が悪い傾向にある²⁾。一方、妊娠時と非妊娠時の乳癌細胞のホルモンレセプター陽性率の間には有意差がないとの報告もあり³⁾、妊娠・授乳期の乳癌の予後が比較的不良なのは、発見の遅れや発症が若年層であることも一因と考えられている。一般に ER, PgR 陽性の乳癌は治療に反応性で予後がよいとされているが、本症例ではいずれのレセプターも陰性であった。

妊娠経過中にはさまざまな検査が侵襲の問題から躊躇され、そのため発見が遅れがちであるが、今回の症例が示すように妊娠・授乳中における乳腺腫瘍の検査として吸引細胞診は侵襲が少なく有効であると考えられた。

文 献

- 1) 蒔田益次郎・他：妊娠授乳期癌の病理学的特徴について、癌の臨床, 36 : 39~44, 1990.
- 2) 鬼頭秀樹・他：妊娠期・授乳期乳癌の臨床, 日本臨床医学会雑誌, 44 : 19~26, 1983.
- 3) Elledge, R.M., et al. : Estrogen receptor, progesteron receptor, and HER-2/new protein in breast cancers from pregnant patients, Cancer, 71 : 2499~2506, 1993.